

母体出生体重と妊娠高血圧症候群の関連

著者	和形 麻衣子, 土屋 菜歩, 中谷 直樹, 目時 弘仁, 寶澤 篤, 栗山 進一, 八重樫 伸生, 菅原 準一
雑誌名	DOHaD研究
巻	6
号	1
ページ	83-83
発行年	2017
URL	http://hdl.handle.net/10271/3293

母体出生体重と妊娠高血圧症候群の関連

○和形 麻衣子¹⁾²⁾、土屋 菜歩²⁾、中谷 直樹²⁾、目時 弘仁³⁾
寶澤 篤²⁾、栗山 進一²⁾、八重樫 伸生¹⁾²⁾、菅原 準一¹⁾²⁾

東北大学産婦人科¹⁾ 東北大学東北メディカル・メガバンク機構²⁾
東北医科薬科大学³⁾

【目的】低出生体重児では妊娠高血圧症候群(HDP)の発症リスクが高くなることが報告されている。現在、東北メディカル・メガバンク事業では、約22,000人の妊婦とその児、夫、祖父母を対象とした三世代コホート研究が進行中である。現時点でデータの得られる例を対象に、母体の出生体重とHDPの関連を検討した。

【方法】高血圧合併妊娠を除き、自己申告の出生体重が集計済みの933人について、母の出生体重2500g未満、2500-3500g、3500g以上の3群に分類し、各群のHDPおよび、妊娠高血圧(GH)、妊娠高血圧腎症(PE)の発症率を求めた。また、2500-3500gを対照とし、妊娠時年齢、非妊時BMI、初産産を調整因子として多変量ロジスティック回帰解析により、2500g未満、3500g以上のGH、PE発症の調整オッズ比を求めた。

【結果】GH36例(3.9%)、PE23例(2.5%)であった。非妊時BMIはHDPあり群で有意に高かったが(21.50±3.21 vs 23.02±4.73), p=0.01)、初産婦の割合、分娩週数、児の出生体重に有意差を認めなかった。母の出生体重2500g未満、2500-3500g、3500g以上の3群で、GHの発症率は6.33%、3.61%、3.77%、PEの発症率は2.53%、2.14%、4.72%であった。GHの調整オッズ比(95%信頼区間)は2500g未満1.71(0.74-3.97)、3500g以上1.50(0.70-3.21)、PEは2500g未満1.34(0.30-6.03)、3500g以上2.50(0.88-7.08)であった。

【結論】母の出生体重が2500g未満、および3500g以上では、GH、PEとも発症率が高い傾向を認めた。今後データの集積により対象症例数を拡大し、詳細な解析を行う予定である。